

## ツァンガとモノスタートス

倉敷 武

グリルパルツァーの『夢もまた人生』には、少なからず、モーツァルト/シカネーダーの『魔笛』と共通の素材が用いられているが、そうした素材の一つとして、黒人の奴隷が挙げられる。本発表では、両作品を軸として、成立年代のうえでそれらの前後に位置し、やはり黒人が登場する舞台作品を一つずつ、すなわちシラーの『ジェノヴァのフィエスコの謀反』、及びシュトラウス/ホーフマンスタールの『薔薇の騎士』を配置し、それらにおける黒人の扱われ方を観察することにより、論者にとっての主要な関心事である『魔笛』解釈の一つの断面を示すことを試みた。

まず、主人であるザラストロから「お前の心はお前の顔と同じように黒い」と罵られて放逐され、最後には新しい主人である夜の女王ともども奈落に沈められてしまう『魔笛』のモノスタートスと、枠内物語であるルスタンの夢の中では呪われながらも、最終的には自由の身となる『夢もまた人生』のツァンガとを比較すると、両者は同じ黒人奴隷でありながら、扱われ方のうえで大きな違いがあることが見てとれる。この違いは、18世紀末から19世紀にかけての現実の奴隷の扱われ方の変化、すなわち奴隷の解放という事態に対応したものとひとまず考えられるが、その際、この事態が意味するところとして、束縛から自由へ、という奴隷にとっての〈進歩〉ではなく、奴隷使用者の側が感じていたであろう罪悪感の存在を指摘したい。そのうえで『フィエスコ』から『薔薇の騎士』に至る四つの作品を観察すると、まずは、いずれの作品においても黒人が非現実的な存在として描かれていることがわかる。さらに、時代を下るに従って黒人の登場人物のみならず題材そのものも非現実化し、またそれと並行して黒人の役柄が巧みに無害化されていく様子も観察されるが、こうしたことには、奴隷使用者と同じ白人である観客が、現実の黒人奴隷やその扱いに対して感じるかも知れない罪悪感を、舞台では感じずに済むようにする効果、すなわち隠蔽の効果があるように思われる。

しかし、このような、時代を下るにつれて巧妙化する罪悪感の隠蔽という流れの中に、あらためて『魔笛』を置いてみると、そこでモノスタートスに与えられている無害な者としての表現は、罪悪感を隠す手段としてはあまりにも単純であるように思われる。いや、全く無害な存在でありながら、黒人であるという理由で罰せられる彼は、無害な存在として解放されるツァンガの場合とは異なり、観客の罪悪感をむしろ積極的に喚起するのではないか。つまり、彼ら二人においては、その末路のみならず、無害な者としての表現が意味するところもまた正反対である。

混沌とした世界が一定の価値観に基いて整序される過程、いわば差別の原理を主題とする『魔笛』において、モノスタートスが受ける仕打ちはまったく本質的なものであり、その原理を暴露することこそが、彼に与えられた役割なのである。